

国語問題 (六〇分) (この問題冊子は十一ページである。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、携帯電話・スマートフォンの電源は切ること。
- 三、時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の受験番号欄の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、解答用紙は三枚ある。解答は解答欄に記入し、その他の部分に何も書いてはならない。
- 六、監督から試験開始の合図があったら、この問題の冊子が、上に記したページ数通りそろっているかどうか確かめること。
- 七、筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなどを使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しきれずに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以下の文章は、昭和十七（一九四二）年に発表された岸田國士きしだくに（劇作家・小説家・評論家・翻訳家）による「外国語教育」である。この文章について、下記の設問に答えなさい。

最近、従来の外国語教育がいろいろの角度から批判されるようになって、例えば、外国語教育が偏重されていたという見方から、授業時間の（ア）さくげんなどが行われるようになった。これに対して、外国語が果して偏重されていたかどうか、むしろ今日の時局（注1）なればこそ外国語の教育はなお一層これを重要視しなければならないのではないか、という考え方が対立している。この点についてのわたくし自身の見解は、やはり外国語の教育は一層重視しなければならぬ——ということ为前提とするけれども、しかし、重要視するにしても、今日までの教育方法がかなり根本的に改革されるべきであると思う。即ち、外国語教育において真にその成果を挙げるためには、従来の教育方法にはいくつかの重大な欠点があるように思うのである。

（あ）日本人が外国語を学ぶ目的をもっと明確に認識する必要がある。従来は、専門的な知識を習得するために、外国語を通じてそれぞれの国の文化に触れてこれを（1）撰取するということが、外国語を学ぶ最も大きな目的であった。また更に一つの大きな目的は、実用的に外国人とある程度まで自由に意志の（2）疎通ができるように、ということであった。しかし、一般に中等学校（注2）で外国語を学ぶ場合には、将来いま述べたような意味で外国語を実際に活用するような職業に進むもの以外は——即ちその数において大部分のものは——常識として一通り初歩的な外国語を習得しておいたほうがいいというふうなこと、例えば看板の横文字だとか新しい外来語の意味ぐらいは解らなければいけないとか、もっと（イ）こつけいな例をいうと、女学校などでは、横文字が読めなくては缶詰の使い方がわからないとか、はなはだ他愛のないことが、しかも公然の理由になっていたと思う。ところで、この第一、第二の目的は、外国語習得の理由として、かなりハッキリもしているし、また納得もできるけれども、第三のいわゆる常識として——という考えは、今後はぜひとも（3）一掃しなければならぬ。これはまったく欧米依存の精神の現われであって、つまりは日本人

の生活の到るところに欧米（ウ）すうはい、あるいは欧米依存の事実があったことを物語るものだと言わなければならない。しかも、事実において、中等学校だけの外国語などは殆んどなんの役にも立っていないのである。例えば、前述の缶詰の使用法を読みこなせるだけの力でさえ、果して充分についているかどうか、甚だ疑問であろう。したがって、多くの場合、ただ英語を習ったという安易な自己満足になっているという有様である。

しかし、そうだからといって、中等学校卒業者が外国語に対して、まったく無知であつていいかといえは、必ずしもそうではないと思う。殊に外来語などもかなり日本語のなかにはいつているのだし、またこれからもそういう傾向が全くなくなるわけでもない。したがって、何かにつけて外国語に関する知識は国民としてやはりある程度は有つていなければならない。しかし、わたくしの考えでは、従来のように、外国語といえはすぐ英語だと考へるような態度は捨てなければならない。そして、中等学校全体を通じて、日本と関係のある諸外国の言葉を教える、そしてどの程度の数にいずれの外国語を教えるかというようなことを、計画的にやつてゆくべきだと思ふ。また、日常生活を通じて日本人が触れる可能性のある外国語を、——これは新しい方法に依らなければならないと思ふが——例えば、各国語の簡単な発音とか、同じ意味の言葉がそれぞれ国に依つてどう異なるかとか、そういうようなことを中等学校で教えるのも一つの方法ではなからうか。見分け方ぐらい覚えておくとずいぶん役に立つ。これは外国語にたいする知識を与えるための、いくぶん新しい方式であり、考え方であらうと思ふ。

○

中等学校だけでやめるものはそれとして、今度は専門学校以上に進むもののためにはどうするか、——これは前述の中等学校の教育法をそのまま適用していいかどうかは疑問である。で、例えば上級学校（注3）にゆくための中等学校と然らざるもの（注4）とを区別する——これは学制全体の改革に属する問題だが——のも一つのゆき方だと思ふ。さらに上級学校で外国語を習得する場合、従来と根本的にやり方を違えなければならない点がある。即ち、これまでは話すことと読むことと書くこととが、全然目的を異にするかの如くバラバラに教えられていた。例えば、会話のための英語だとか、或いはただ本を読むための英語だとか、要するに①非常に偏した外国語の身につけ方を、ほとんど総べてのものがやっていたということである。

殊に大学なんかでは、専門の書物が読めれば良いというふうに一般に考えられていた。また、書くことにしても、専門的な論文が書ければいい——実は専門的な論文は一般に非常にやさしいものだと思われているが——とされていた。(一い)、そういうふうな外国語の身に付け方をした人には、話すということはまったく専門外のことであるのみならず、会話などはできなくても別に何の不便も感じない。むしろ、会話は外国語習得の最も俗な分野であると考えられさせた。実際また、会話を専門に学ぶ人々、例えば外交官とか通訳とか、或いは外国商館に勤めようとする人とかは、ただ会話ができるようにするために、実につまらぬ苦心を払い、肝心なことがお留守になるという有様である。こういうふうな考え方でいままでも外国語の教育が行われてきた。ところが、実際問題としては、そういう外国語の習得の仕方が、やはりそれぞれの目的を半分ずつしか達していないのである。例えば、大学の先生で、専門的な本はかなり読みこなせる人が、その専門的な学問について、さらに欧米の学者と議論をするような場合に、口が自由に利かなくなつてほとんど用が足りないことがあり、研究にも事を欠くとすれば甚だ考えものである。ところで、こうした結果になつたことは、外国語を通じて専門的な知識を身に付けるには、本さえ読めれば良いという、いわば一種の自己弁護が成り立つことに依るのだが、このことがそもそも(A)外国語に対する間違つた考え方に原因しているのである。即ち、外国語というものは、「外国人のように」喋つたり書いたりしなければいけない、こういう考え方が過去において日本人の頭になりに深く浸み込んでいたように思う。例えば、英語ならば「英米人のように」書ける、喋れるということが、英語学習の理想であつた。ところがそんなことは馬鹿々々しいことだから、よほどどうかした人でないと一生懸命にはなれない。結局それを(エ)あきらめて、日本人としてまず可能な方向にゆく、というのが自然であろう。「外国人のように」喋ることが一番うまい喋り方であり、最も理想的な会話であると考えているために、そこまで自信のないものは、つい喋るといふことが自尊心を傷つけるわけだから、なるべく下手に口を利かないようにする。それを敢えてするのは最も安易な程度の外国語を「操る」ことで満足してしまふ結果になる。例えば、日常の挨拶の仕方を非常によく心得ているとか、或いはまた実に月並な俗語を連発するか、要するに外国人の口真似をすることが、いわゆる上手に外国語を操ることであるとされる。その結果、日本人が日本人としての能力でものをいうよりも、非常に単純な低調なことしかいえなくなるのである。手紙などを書く場合も同様で、外国人のような手紙を書くこととするから、結局は外国の無学な女か子供の書くような手紙になつてしまふ。(一う)、吾々が外国語を習つたような従来の

習い方でいけば、当然そうならざるを得ないのである。それではどうすればいいかといえ、やはり②日本人として日本人流に外国語を使いこなす、ということを目標にすべきであると思う。

この意味において、——これは少し細かいことになるけれども——外国語の一つ一つの言葉の意味は正確につかまなければならないが、しかし、それを日本語を使うような気持で、つまり自分の考えを述べる必要な武器として用うべきである。もとより文法や語彙の正確なのに越したことはないが、あくまで、「自分のもの」をそれで伝える工夫をすべきであって、英米人風のいい廻し——つまりイデオムなどというふうなものは、日本人が無理に使うのは不見識だということである。むしろ彼等はこういういい廻しはしない、しかし、いかにも日本人でなければ表わせないものの考え方、もの感じ方がその表現のなかに示されている——というような英語を使うべきである。かの内村鑑三（注5）という人はそうであつたといわれる。この人は実に堂々と二時間ぐらい続けざまに英語の演説ができた人であるが、その英語はイギリス人の使う英語でもなければ、アメリカ人の英語でもない、実に独特な英語であつた。独特なというのは、要するに彼が日本人として英語を使つていたという意味である。（え）、その英語はよくイギリス人やアメリカ人を感動させる英語であつたとわたくしは聞いている。これはもう当然そうあるべきことであつて、日本人は今そういう語学力をもつた人が必要としているのである。この心構えが教師にもでき、学生にもできれば、日本人の外国語教育は、従来に比して数倍の効果を挙げ得るのではないかと思う。

それには、まず語学を試験のために勉強するなどということはもちろん絶対に排撃しなければならないが、また、例えば、学生がイギリス人やアメリカ人のような作文を書かなくても、彼がその学んだいくつかの言葉を大胆に駆使して、いかにも日本人でなければ書けないような作文を書けばそれで満点を付けてやる——というふうにせひしたいものである。ここでわたくし自身の経験をいうと、実はわたくしもフランス語で話したり書いたりするのは（4）不得手でもあり、嫌いでもある。そのために、フランス語の手紙を書くのが非常にいやで臆劫であつた。ところが、必要に迫られたからでもあるが、こんなことではとても駄目だと思つて、思いきり大胆に日本語の直訳みたいな文章で、手紙など綴ることにした。それから急に手紙を書く気持が楽になつたように思う。そればかりでなく、その手紙が却つて非常に面白いとほめられたことさえある。例えば、ヨーロッパ人ならば、親し

い情を表わすために、手紙の末尾に「接吻を送る」というような言葉を記すけれども、日本人にはそんなことはとても気恥ずかしくて書けない。そこで、そんな調子で書くよりは、やはり日本人らしく「頭を下げる」と書くほうが面白い。つまり「頓首」とやるのである。それで相手には充分意味も心持も通じるし、日本的な味も出るのである。

吾々は中等学校から外国語を学んで外国の言葉を覚え、（お）外国人の書いた文章に接触するわけであるが、その場合は、何かしら日本人として「言葉」の機能というものについて、いままで国語の授業では気が付かないでいたものを、はじめて発見することがあるように思う。言葉というものはこういうものだったのか、こういう力を有っているのか、——と気が付いたときから、急に外国語に対する興味が起つて来る。しかも、それは文学というものに対して、はじめて眼が展けた時でもあるのである。こういうことは、本来ならば、国語教育を通じて行われるべきことである。ところが、これまで日本の国語教育はどうも言葉としてのセンスを国民に与えるように仕組まれていなかった。即ち現代の日本人の多くは国語を通じて文学的なセンスを掴み得ないで、むしろ外国語を通じて掴んだということがいえると思う。要するに、従来は日本人に対して日本語教育が充分に行われなかった。その欠陥を非常に皮肉なことであるが、外国語教育によって大部分補っていたともいえるのである。このことは、殊に外国の優れた文学的作品に接するようになると、一層はつきりして来る。かつて、ある時期には、外国語をやらなければ新しい現代の文学の（5）真髓に触れられない——というような、日本人として甚だ悲しむべき実情にあった。将来、国語教育が一層進歩して、これが日本語の正しい力強い訓練というところにまでゆき得たとしても、なおかつ外国語が今日までに果してきたそういう一つの役割は、外国語教育を担当する人々が充分に自覚しなければならぬことであると思うが、いずれにしてもこの点に相当考えるべき問題があるように思われる。この意味からいって、③今日、外国語教育の問題がいろいろ政治的に考慮せられるに当たっても、この点を忘れてはならないと思う。即ち、外国語を通して触れる文学的なものは、ただたんに人々を外国に親しませるだけでなく、やはり文学の本質に触れさせるのであって、決してそのために外国を怖れる必要はないということである。

最後に、これはちよつと外国語教育の問題からは離れるが、日本では中等学校の殆んど全部が英語を教えている結果、外国語といえはすぐ英語のこ
としか考えないという傾向がある。したがって、西洋風とか、西洋式とかいえば、それはイギリス式乃至アメリカ風と考えがちである。このことが日
本人の外国、特に欧米の認識を非常に誤らせている。西洋と英米とを混同していること、これが――わたくしとしてはもう少し詳しくいたいこと
あるが――一案外いろいろのところに影響しているのであつて、(B) 日本人の正しい西洋認識に対して著しい障碍しょうがいをなしているのである。また吾々
の日常用語のなかで使われている英語は日本人の生活のなかにならいろいろの影響を及ぼしている。例えば今日、「教養」という日本語ができてい
るにも拘らず、カルチュアという言葉がしばしば使われる。しかしカルチュアといえは、これはイギリス人的な教養である。カルチュアという言葉を使
つて、日本人にカルチュアが有るとか無いとかいうが、これではいかにしても日本的な教養即ち「たしなみ」を連想させない。それはイギリス的な教
養の形式的輸入なのである。ところがそれは西洋的な教養でさえもないのである。それを日本人がカルチュアといつて、何か普遍的な意味を与えよう
としても無理なのである。こういった点をひとつ改めて考えなおさなければいけないと思う。

一般に、専門教育を受けた人々は、これは英語に限つたことではないのだが、それぞれ専門にやつた語学を通じて、いま教養の不統一という現象を
起している。フランス語でやつた人はいくぶんフランス的な教養を身に付け、ドイツ語でやつた人にはある程度ドイツ風の教養がしみ込んでいる。そ
してお互いにそういうことに気がつかないで、何かお互いのあいだに本質的な違いがあるかのように感じ、まったく不思議な考え方の対立をみせたり
している。これは日本の今日の文化にとつて重大な問題である。ある国の言葉を少し深く勉強し、その国の文化に接触すると、かなり批判的にその国
を観ていても、とかくその国に対して親しみをもつ。ある意味においてはその国に対して愛情を感じる。そこで、自分の国についてその国が好きにな
るのは自然の人情である。ところが、日本人の場合は、どうかすると病膏盲やまいこうまうに入つて(注6)、自分の好きな国の敵国は、自分の敵国のような気がし
てみたりする。例えば、フランスが好きな人は、フランス人が嫌いな民族をフランス人と一緒になつて嫌う。であるから、その民族が日本と非常に近
い関係にあるような場合には、日本人として一種の矛盾を感じるようなこともあり得るわけである。こういうことは、仮りに人情としては已むを得な
いとしても、大いに反省を要することである。もとより外国語を専攻するためにはその国を知らなければならぬ。しかも、ある国を真に理解するとい

うことは、その国にたいする深い愛情なしにはあり得ない、ということもまた事実である。こういう点で従来やや(才)おぼれるというような傾向が無いでもなかったということは、これは個人としては大したことではないかも知れないが、日本の国民として考えると、その影響は甚だ大である。これは将来大いに考えなければならぬと思う。

※出典 岸田國士「外国語教育」(初出『改造』第二十四卷第二号、昭和十七年二月)

「青空文庫」(<https://www.aozora.gr.jp/cards/001154/card44683.html>)より引用。引用に際しては、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め、一部省略するなどの編集を加えた。また、今から八〇年近く前に書かれた文章であるため、今日では差別表現として問題となる文言も含まれているが、原文のままにしてあることをお断りしておく。

注1 今日の時局は日本がハワイの真珠湾を攻撃し、アメリカに宣戦布告したのは昭和十六(一九四二)年十二月のことであった。本文「外国語教育」が雑誌に掲載されたとき、日本はアメリカと戦争中であり、英語は「敵国語」とされていた。アメリカとの戦争中であっても、中学校(男子のみ進学できる)や高等女学校などの中等学校での英語教育は継続して行われていた。

注2 中等学校はいわゆる旧制中学校のこと。昭和十四(一九三九)年に教育審議会が出した中等教育に関する答申で、男子のみの中学校、実業学校、女子を対象とした高等女学校をあわせて中等学校としている。入学最低年齢は十二歳で、修業年限は四年であった。

注3 上級学校は高等学校のこと。入学最低年齢は十六歳で、修業年限は三年であった。大正八(一九一九)年に発布された学制では、中学校卒業後に高等学校を経て大学へ進学するルートと、それ以外の教員養成学校や実業学校に進学するルートがあった(文部科学省、学制百年史 資料編、

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318188.htm 2021/02/10 閲覧)

注4 然らざるものゝさうではないもの。

注5 内村鑑三『明治・大正期に活躍したキリスト教伝道者、思想家。アメリカのアマースト大学とハートフォード神学大学で学び、帰国後に『余は如何にして基督教徒となりし乎』を英文で出版した。

注6 病膏肓に入る『中国の故事から、病気が悪化し治療の施しようがなくなること。趣味や道楽に熱中しすぎてどうにも手がつけられなくなることのたとえ。

問一 傍線部(1)から(5)の読みをひらがなで書きなさい。(配点各一点)

問二 傍線部(ア)から(オ)を漢字に直しなさい。(配点各一点)

問三 (あ)から(お)に入る語として適切なものを次の中から選び、その記号を記しなさい。なお、同じ語が二度用いられることはないものとする。(配点各一点)

A そして

B しかし

C まず

D したがって

E しかも

問四

傍線部① 非常に偏した外国語の身につけ方とはどのようなものか、筆者の考えに当てはまらないものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

A 外国語で話しができなくとも、外国語で書かれた専門的な論文を読むことができるようにする。

B ネイティブスピーカーのように話せることを目標に、外国語会話を専門的に学ぶ。

C 文法や語彙を正確にマスターし、英米人風のいい廻しができるようにする。

D 外国人とある程度まで自由にコミュニケーションがとれるようにする。

E 挨拶の仕方をしっかり心得て、日常会話が無理なくできるようにする。

問五

傍線部② 日本人として日本人流に外国語を使いこなすとはどのような意味か、筆者の意見として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A 日本人らしく堂々と自信をもって流暢に外国語を話すことができる。
- B 外国語のイディオムをたくさん使いこなして、日本のしきたりや慣習を相手に伝える。
- C イギリス人やアメリカ人を感動させることを目指して外国語を話す。
- D 文法や語彙は間違ってもよいから、外国人に対して日本の文化を伝えることに努める。
- E 日本語の直訳みたいな表現になっても構わずに、日本人らしい感じ方を外国語表現のなかに込める。

問六

傍線部③ 今日、外国語教育の問題がいろいろ政治的に考慮せられるに当たっても、この点を忘れてはならないと思う。について、筆者の意見として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A 国語教育は、日本国民としての自覚や思想を涵養するために、言語よりも文化の教育に力を入れるべきである。
- B 外国語教育に携わる人は、言語そのものに対する興味関心を高める授業をするべきである。
- C 外国語教育には、文学の真髄に目を開かせるという機能があるので、その点を考慮した教育を行うべきである。
- D 言語政策は、欧米に随順する立場をとることなく、日本の国益に沿うよう多様な言語のできる人材を計画的に育成すべきである。
- E 文学的センスは国語教育によって身につけねばならないため、国語教育を外国語教育より優先すべきである。

問七 傍線部(A) 外国語に対する間違った考え方 とは、どのような考えのことか。また、この考えにはどのような弊害があるか。筆者の考えを

六〇～七〇字でまとめなさい。(配点五点)

問八 傍線部(B) 日本人の正しい西洋認識に対して著しい障壁をなしている について、次の三つの問いに答えなさい。(配点十五点)

- (1) 筆者は、日本人が西洋をどのように理解していると考えているか。六〇～七〇字で説明しなさい。
- (2) 筆者は、どうすれば正しい西洋認識が可能になると考えているか。六〇～七〇字で説明しなさい。
- (3) 現代日本人の西洋に対する理解の仕方について、どう思うか。あなたの意見を理由を挙げて、六〇～七〇字で述べなさい。